

# 草庵仏教

第121号  
(発行日)  
2000年7月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX (0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋西宮店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 心の対話

C Aさんから、へひねくれた人(や)と、悪口言われて、ムカツとききました。

D Aさんから悪口言われて腹が立ったんです。Aさんが悪いというんです。

C ええ、悪口を言ったAさんが悪い。

D 悪口を言った人が悪いのはわかります。ただ悪口言われてすぐ腹を立ててしまうあなた自身はどうなんですか。

C そうですね、私は腹立ちやすいと思います。

D 悪口を言ったAさんをマツチの火とします。マツチの火を投げられて、怒りに燃える私はちようどドラム缶にいらつぱい入っている灯油のようなものですね。

C なるほど、ちよつとこのとで腹を立ててしまう私はドラム缶の灯油のようなもので、小さなことですぐ怒りに燃え上がる心をもっているんです。

D 怒る外縁はいろいろありますけど、縁によって怒ってしまふ己の煩惱が一番やつかいなものですね。

C ええ、やつかいなのは他者よりもむしろ己の煩惱の心ですね。腹を立てさせたAさんも悪いけど、それによってすぐ腹を立ててしまう私の心こそ一番問題なんですね。

C 自分に向いて、自分が問題になるのはなかなか難

D そうですね。その理由の一つは、煩惱の深い私、あさましい私の姿を見るのはイヤなんです。私たちは総じて、C どうして私たちは自分のイヤな面を見るのを避けるのでしょうか。

D それは私たちが、自我を立場にして生きていくからではないでしょうか。

C 自我というのはどういうものでしょうか。

D 自我とは、是非・善悪・利害得失などを判断して選ぶ機能といえるでしょう。ただ人間の自我は、我愛や利己心にふりまわされてしまっています。

C 我にとらわれ、我をまもろうとする心で、物事を判断し選択してしまうのです。

D ええそうですね。

C 我が身を愛する自我を立場とすると、あさましい自分の姿、みにくい自分に目が向きにくくなるのですか。

D そうだと思いません。自我は自分にとって都合の良い自分の姿は喜んで迎え入れます。たとえ自分自身は善良な人間だとか、まともな人間だとか、親切な心の持ち主だとか、よく気のつく人間だとか、そういう自分であると思いたいし、そう思うことは嬉しいですし、自分に自信をもてますからね。

C ですから自我はそういう好ましい私はすんなりと受け入れます。

C そのような自分であると

思っておればこそ、自信をもつて社会に出れますものね。

D 逆に、冷たい性質とか、ケチな根性とか、頭が悪いとか、時にはぶさいくとか、そういう自分のマイナスイメージは受け入れるのは辛いですが、無意識的にもそう思わないようにしていると思いたいです。そんな自分ではないと思いたいです。しかし、現実的には、たとえば利己的で頭が悪いという自分が見えることがあり、そういうときは、(あの人よりはましや)と言う風に、自分以下の人を作って安心しているのです。

C でも実際には自分に自信がなくて、自分の性格がイヤになつたり、ぶさいくな自分がイヤになつたりします。

D ええ、そういう私を認めるのはイヤだけど、そう認めざるを得ない場合があります。そうなる、大きな劣等感におちいつて、自分に自信を無くしたり、時には自殺にまで自分を追い込んでしまいます。

C そういうのも、自分を受容出来ていないからだとわがざるをえませんか。

C 自己を受容するとはどういうことですか。

D 嘆くことなく、落ち込むことなく、納得して、ありのままの自分を素直に承認することといえるでしょう。

C 自分にとってイメージの良い自分は受け入れ、悪いイメージは無意識的に拒絶している場合が多いですね。

D ええ、先ほども言いましたが自我というのは、自分のプラス面を愛し、マイナス面

は嫌って排除しようとしています。しかし、そういうマイナス面も私にほかなりませんから、それを認めたくない自我の間で葛藤がおこるのではないでしようか。それで、自分に腹が立つたり、イライラしたり、うつとうしくなつたりするのは、自分自身を受容することから自分の全体を受容することが大事だと思います。

C 自我で生きるとどういう人間関係になりますか。

D 自分を許せなくなったり、悪口を言う人を許せなくなったり。責め立てるようになります。自分は何時でも(良い人間だ)と思いたいし、思わなくては生きられないのが自我ですから。ですから、私を悪く言う人に対して、自我は必要以上に責めたり恨んだりします。まさに自我による自己肯定の結果といえます。

C 自分でもウスウス感じている自分の醜い点を、人から突かれると、すぐ腹が立つのは、自我は自分のマイナス面を認めることを嫌うからでしょう。

D そうだと思いません。自我の強い人は自分を非難する人に対してひどく攻撃するでしょうし、自我の弱い人は自己弁護や責任転嫁をして自我を



風流傘  
(C)SHOGAKUKAN  
INC.

守ろうとします。〈私だけが悪いんじゃない〉とか〈あの人があんなことをいうから私もついやってしまったのだ。〉もともとはあの人のせいだ。とかです。どちらにしても、自我を否定されると、自我は反発したり、弁解や責任転嫁をして、自我を守ろうとします。

：：：：：：：：：  
C ではどうしたら、忌み嫌っている自分のマイナス面を受容して、ありのままの自分、いわば自分の全体を素直に受け入れることが出来るのでしょうか。

D いままで何度も言いましたが、自分の善悪、良悪・賢愚・美醜の全体を承認し、引き受けることは、自我には出来ないことですね。自我は自分の中の一つの機能、いわば部分にしかすぎませんから、部分には全体を包むことは出来ないように、自我は私の存在の全体、私の性質の全体、プラス・マイナスの全価値を、そっくりそのまま受け取ることは出来ないと思います。

C ということは、自我はマイナス面としての悪とか愚かさとか醜さとかを認めて、〈これが私です〉と受け入れることは出来ない、というのですね。  
D ええその様に思います。では、人間は自我中心の立場でしか生きられないのでしょうか。  
D いいえ、そうは思いません。私の全体を受け入れることは可能だと思います。

C それはどうしてですか。私たち一人一人には、私

の全体を包んで受け入れてくださる阿弥陀仏の慈悲がかけられています。その阿弥陀仏の慈悲が私を撰取し、私のプラス・マイナスの全てを抱き取ってくくださる、その慈悲にふれることです。それによつて、どうしようもないお粗末な私自身を〈これが私です〉と承認し受け取ることが出来るのです。

C なるほど、そういう阿弥陀仏の慈悲にふれてこそ自己受容が可能なのですね。

D ええそうです。阿弥陀仏が私のありのままの全部を受け入れてくださるのです。阿弥陀仏を無碍光と申されるのは、私がいかに最悪の人間であつても、その悪い性質や状態に〈碍りなく〉〈さまたげられず〉受け入れてくださるからです。

C お内仏（仏壇）の中の掛け軸に〈帰命尽十方無碍光如来〉という字が書かれていますが、あの無碍光ということですか。

D そうです。絶対受容の慈悲のお心を表されたものです。

C ひとたび阿弥陀様に受容されると具体的にどうなるのでしょうか。

D 私は利己的な人間であること、欲深く、怒りやねたみの深いものであること、惜しみ心が強く、へつらいや偽りの多いものであること、冷たい根性をもっていること。それらを〈その通り〉、私はそのような人間だ」と素直に認め、これを受け入れ始めます。

C 始めるというのは、阿弥陀仏の大悲の受容を

知らされても、私の悪の全てを承認し受け入れることは、普通すぐにはいかなないのでないでしょうか。長年の自我の宿習が抵抗するので。しかし、大悲の受容の深さが私に浸透するにしたがつて、私が自分自身を次第に受け入れていきます。

C 善悪ありのままの私を受け取っていくのですね。

D ええ。そのように自分の全体、ことに私の悪や闇やどろどろした醜さを承認し、これを私として受け入れていくと、不思議と他者の存在も、そのありのままを受け入れやすくなります。他者に悪や醜さがあつても、相手の存在を受け入れることが可能になります。受け入れるとは、その人を憎まず、恨まないことであり、その道が開けてきます。

C たとえば、私をののしたり、悪口をいう人を憎んだり、恨んだりしないということですか。

D ええ、そうなることが可能なのです。たとえば、親鸞聖人のお手紙の中にも、念仏を申す人をののしたり、そしたりする人に対して、『この念仏する人をにくみする人をも、にくみする人もあるべからず。あわれみをつなし、かなしむころをもつべしとこそ、聖人（法然）はおおせごとありし』とおおせごとありし』というお言葉があります。

C 自分のマイナス価値を受け入れるということは、自分の倫理的な邪悪さだけですか。

D いいえ、私たちがマイナス価値としているような、〈死

にゆく私〉、〈古いゆく私〉、〈ぶさいくな容姿の私〉、〈孤独な私〉、〈才能のない私〉、〈頭の悪い私〉、などなど劣等感を抱かせるものもろの〈あわれな私〉の全てを、私は受け入れるようになってきます。こうした〈あわれな私〉も自我は素直に受け入れません。だから私の内部で、自我とマイナス面の自分とが対立して、精神的に不安で、不足感に悩まされるのです。

C マイナス価値の部分（それ私も私）と認めるんですね。そうすることによつて、私がいけるのですね。

D ええ、そうだと思います。ただ一つ大事なことをつけ加えますと、一応プラスの自分、マイナスの自分という様に分けましたが、絶対価値としての阿弥陀仏の光の前には、プラスもマイナスも含めて私の存在の全体が〈愚悪の存在〉、〈無知と悪を本質とした存在〉なのだと思われています。

ローソクの光も蛍光灯の光も、それなりに明るいものですが、太陽の光の前には闇に等しいように。仏の純粋なお心に照らされてみれば、私たちの善心には毒が混じつており、〈汚れている〉と知らされるのです。

C 正信偈に極重悪人という言葉がありますね。  
D ええ、私のありのままの存在は〈極重の悪人であるぞ〉と、仏陀が明示し下さるので、仏陀が私をののり下さるのを受け入れることは、煩惱悪業の深い存在が自分自身のまことの姿であると知らされ承

認することなのです。C いったん、自分の悪が知らされると、もう〈私は善い人間だ〉と思わなくなるのでしょうか。

D まれにそういう人もいますが、私達の日常はとかく自我の思いで生きています。ですから私は一生涯、〈私は善き者、正しき者、賢い者、清らかな者〉と思いががる自我を離れられないですね。

C 自我を離れられないなら、以前と違うのですか。  
D 自我を自我とお念仏によつて知らされ、同時に阿弥陀仏の絶対受容を知らされて、自我が、そのつど南無阿弥陀仏に否定されていくのです。

〈ああまた高上がりしてました。相も変わらぬ煩惱の深い私だ〉とくり返しまき返して、思い上がる自我を否定していただき、同時に、そんな私に注ぎたもう弥陀の慈悲を仰ぐ一生を送らせていただくのです。



拡大する場合は画像をクリックしてください

# 真宗聖典講座

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかに、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云々（歎異鈔第七章）

## 〈歎異鈔第七章第二講〉

お念仏をいただいた者は無礙（まことの自由）の一道を歩む者となるといわれ、その理由として、「天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえ」と、四つのことがあげられています。このことは、裏から言えば、私たちの人生は、この四つのことから大きな束縛（有礙）を受けていると、読むことが出来ましょう。

最初に天神・地祇とは何でしょうか。これについて梯実円師は「どちらももとはインド古来の神々をあらわす言葉でした。天神とは、天上界にいるという梵天や帝釈天のことであり、地祇とは地上や地下にいるという八大竜王とか、閻魔法王とその眷属である五道の冥官とよばれるようなものがそれでした。しかし、仏教が中国や朝鮮半島や日本に土着していくにつれて、それぞれの民族の信仰の対象であった神々が、仏教の中に取り入れられてきました。わが国の場合、天神とは天孫降臨系の神々で、その代表は天照大神（あまてらすおおみかみ）や天津児屋根尊（あまつこやねのみこと）などのいわゆる天津神（あまつかみ）を意味し、地祇は大国主命（おおくにぬしのみこと）をはじめとする国津神（くにつかみ）をさしていました。」（「歎異鈔」と説明されています。）

なお、天津神（あまつかみ）は、高天原の神々で、その主神が天照大神（あまてらすおおみかみ）、それに対して国津神（くにつかみ）は土着の神々で、その頭領たる神が大国主命です。

人は神々を作り、その神々をまつてきました。ではどのようにして神々が作られてきたのでしょうか。

太陽や山や水といった自然の恵みによって、人は収穫を得ていのちを支えてきましたし、逆に、いったん自然が荒れると人の命を奪うものとして怖れられてきました。こうした自然の働きにたいして、有り難さ・神聖さ・不思議さ・おそろしさを感ずるようになりました。そして、それらを神格化して神としてまつりました。すなわち神々は、日月星辰や風雨雷雲のような天体・気象現象を神格化したものであり、また木石や山水や動物に精霊の存在を感じて、これらを神聖化したものです。またほかに、人間神といふべき神が立てられました。いわゆる偉人とか英雄とか祖霊を神としてまつりました。

我々の祖先は、太陽にしても木や水にしても、蛇や狐にしても、英雄にしても、そういうものを神聖なものとして、神殿や社に神とおまつりしましたが、いったんまつると、その神々がどういう神であるかはほとんど問わないで、神に祈願をしたり罪をはらうてきました。

それによって、神から、福や恵みをさすけてもらおうとし、あるいは災難が来ないようにと祈ります。ひとこと言えば、「除厄招福」のために神々に祈るのです。そして、神は人間に、時には福を恵み、時には罰を与えるものとされてきました。それで、「困ったときの神だのみ」とか「神さんの罰が当たる」とかいわれるのです。

これらの神々をさらに統一し、唯一の神を立てると、たとえば外国では「エホバの神」となりましょう。エホバの神からユダヤ教・キリスト教・イスラム教が生まれました。すなわち神は愛（恵み）の神であり、さばきの神です。この神に服従することが信仰とされます。神に服従する者は神に愛されて、神から恩恵を受け、逆に神に逆らう者は神の怒りを受け、ついには滅ぼされるといわれています。

日本の神々は、エホバの神ほど強い性格はもって

いませんが、やはり恵みと罰の神々です。

明治になって、日本の国家統一を図ろうとした指導者、ことに伊藤博文はヨーロッパを視察し、日本を強固な統一国家にするには、キリスト教の神のよきな存在が日本の国造りには必要と考えました。そこで、日本の古来の神道を国家の宗教にし、天照大神を主神として、大祭司である天皇を神格化し、それによって国民を一つにまとめようとした。戦前は、神的存在の天皇に服従するものは賞賛され、背く者は弾圧されました。恵みと罰の神的象徴が天皇だったと、私は思います。

さて、神は八百万の神といわれるほど沢山あっても、神に祈る心情は同じといっても過言ではありません。要するに、おかげをいただき、厄を払い、禍が来ないように祈るといふ心情です。この心情は仏法に照らしてみれば、功利心（罪福信）です。福を愛し、禍を憎む心は煩惱です。福とは生であり、健康であり、繁栄などです。一方、禍とは、死であり、病気で、貧困であり、不名誉であり、失敗であり、衰退です。私にとつて都合の良いもの（福）はこれを愛し、また貪り、都合の悪いもの（禍）は、これを嫌い、また憎む。こうした愛と憎しみの煩惱が神に祈る凡夫の心根になっています。

断っておきますが、神が即悪いというのではありません。神に祈る凡夫の心の内質を煩惱であるといふのです。

なぜ、神に参るのでしょうか。一つは、不安だから参るのです。厄介な病気にかかりませんようにとか、交通事故に遭いませんようにとか、不安だから参るのです。また私欲から参るのです。もっと商売が繁盛しますように、試験が合格しますように、健康で長生きできますように、時には敵に勝ちますようにとかであります。「ああなりませんように」「こうなりませんように」「ああなりたい」「こうなりたい」といふ心情は、愛憎の煩惱であります。

これが祈りの心の元になっていますから、いかほど神に祈っても、煩惱が主となつていくゆえに、まことの安らぎ（涅槃）は与えられないのです。いつまでも「まことの安心」は恵まれず、与えられるのは一時の慰めだけです。

（続）

# 香樹院徳龍師の言葉

ある人、香樹院師へ申し上げて曰く「こんな心ではという心はなれられませぬ」と。仰せに「その心だからよく聞くと、その心目当てに起こして下された御本願じゃ」

ある人が、信徳兼備の名師として名高い香樹院徳龍師にお尋ねになった。「こんな心ではという心はなれられませぬ」と。

私たちの現実はいつでも「今の心」の他にはない。心に先立つ事実があるといわれるが、その事実を感じているのも心である。子供のことを思っているのも心である。ニュースを見ているのも心である。寒さ暑さを感じているのも心である。将来のことを思っているのも心である。凡夫の現実が心であるといつても間違いではない。

その中で、何とか救われたい、どうかして真実にあいたい、と聞法し求道するのである。すこしく人生を内省するとき、人は「このままでは人生は空しい。何とか真実まことにふれたいものである」と願わざるをえない。それが人間の根本的願望である。それゆえ、宗教を求めるのである。

宗教的な関心から、真宗の聞法を重ねていく内に、かならずぶつかる壁がある。

「生かされていることに対する感謝が大事である」と聞かされる。しかし、聞かされても、心からなる感謝できない私が残る。「汝の罪を悔い改めよ」といわれても、心から悔い改めていない私が残る。「本来、人は因縁の集まりにすぎない。無我なのだ。それに気づけよ」といわれても、無我であると感知できない私が残る。「いのちの尊さに目覚めよ」といわれても、自分と家族のいのちの大事なことは分かっている、他人のいのちの尊さにはとても目覚めることのできない私が残る。「我が身の我執我愛の罪悪深重に目覚めよ」といわれて多少の悪は知れても、極悪

深重とはとても知れぬ私が残る。「今この身の事実が目覚めよ」といわれても、身の事実にほつきりと目覚めることの出来ぬ私が残る。「仏法を喜べよ」といわれても、喜ぶことの出来ない私が残る。「本願を信ぜよ」といわれても、信じることの出来ない私が残る。「疑いを晴らせよ」といわれても、疑いの止まぬ私が残る。「計らい離れよ」といわれても、計らいが取れない私が残る。「弥陀をたのめよ」といわれても、弥陀をたのむことのできない私が残る。「このままが仏のお手の中だから心配するな」といわれても、お手の中と知れぬ私が残る。

その残った私が、助からぬ私である。一闍提の私である。無有出離之縁の私である。今、香樹院師に尋ねられた方は、この助からぬ私を問題にしているのではなからうか。「こんな助からぬ心ではいかがいまししよう」と切羽詰まっていますのである。

富士の山ほど大量に聞き込んだ仏法を全部背負ったまま、暗黒の闇に落ちてゆくほかないのである。無仏法のまま、無信のまま、外道のまま、瞑目合掌、落ちてゆくほかないのである。これが私の本性だから仕方がない。もはや救いから全く除外された者、それが私である。

その問いに対して、香樹院師は実に直裁に申される。「その心だからよく聞くと、その心目当てに起こして下された本願じゃ」と。

ずぶずぶと真つ暗闇の中へ沈むほかない私の心、その心こそまこと弥陀の本願が「引き受ける、まかせよ」と勅命をもって、めざしたもう心である。弥陀が「助ける」と仰せられるのは、「絶対無救済の私」を目当てとしたまうのである。「我が名をとなえよ」が、まさに落ちかかる身にふりかかるのである。

禿顯誠師の法歌に  
「おちかかる 身をばそのまま 救うぞと ひまなくひびく 弥陀の喚び声」

とあるが、この消息を歌われたものであろう。また香樹院師の

「助けるぞ たのめの親の 喚び声の 今ぞ聞こえし 南無阿弥陀仏」  
の歌も、「助けるぞタノメ」という仰せに同じ感銘を

受けるのである。

「こんな心では」という思いは、一生涯続くのであろう。しかし、ひとたび弥陀の本願のお心にふれたなら、いつでも「その心だからよく聞くと、その心目当ての本願じゃ」という大悲が通ってくださる。そのつど弥陀大悲に返らせていただけなのである。「そんなお前の心だから」とは実に阿弥陀仏の大悲の仰せである。「その心だから我に助けさせてくれよ、まかせてくれよ、南無阿弥陀仏はそんなお前のためなのだよ」との思し召しである。まことに歎異鈔第九章の「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」である。まことに弥陀の本願は、助からぬものを目当てに助けたまう本願である。(了)



細杷  
(C)SHOGAKUKAN  
INC.

## 【寺院ニュース&雑記帳】

六月六・七日。同朋会館へ行く。信徒のMさんと一緒である。Mさんが本山で帰敬式を受けたためである。Mさんは本願寺に参るのは全く初めて。会館の奉仕団は金沢教区からの聞法婦人会の人たちであった。帰敬式・お内仏のお給仕・お掃除・諸殿拝観など、さまざまな希望を一泊二日でしたというところで、殆ど実質的な研修はできなかった。同朋会館へ来られる人たちは現在、研修を受けるといふより、本山でしか経験できないさまざまな事や行事を目的に来られる傾向が強い。以前は研修を中心に盛んにやっていたもので、現在のこうした傾向は聞法研修の衰退ともいえる。